

の死亡率」と第2章「精神病院でのデング熱実験」から成っている。第Ⅱ編「空襲・戦闘のなかの市民」は、第1章「空襲時精神病一植松七九郎・塩入円祐の資料から」、第2章「塩入円祐・岩佐金次郎による空襲生活調査」、第3章「空襲の精神医学」、第4章「沖縄戦による晩発性のPTSD」、第5章「原子爆弾投下による精神障害者・市民の被害」の全5章構成である。第Ⅲ編「戦争のなかの精神医学研究」は、第1章「戦場心理の研究—早尾庸雄による日中全面戦争従軍の記録」と第2章「『精神神経学雑誌』における研究主題の変遷」から成り、第Ⅳ編「戦争の周辺で」は、第1章「大阪府立中宮病院と禁野火薬庫爆発」と第2章「大阪脳神経病院事件」という2章から構成されている。「付録」は、第1章「『大東亜雑誌』抄」と第2章「占領下五月祭の原子爆弾症展」を、2段組で収録している。最後に「死から目をそむけるな—あとがき」で結ばれている。なお、第Ⅱ編「空襲・戦闘のなかの市民」の第3章、第4章、第5章は、順に野田正彰氏、蟻塚亮二氏、中澤正夫氏からの寄稿であるが、それ以外は岡田氏の執筆によるもので、その「原型は、精神医学史学会および15年戦争と日本の医学医療研究会で報告し、ついで『15年戦争と日本の医学医療研究会誌』にのせたものである」（本書219頁からの引用）。

さて、本書の内容は太平洋戦争に関わる精神障害者問題の広範にわたり、紙面が限られたこの書評では上記の数々の章タイトル以上の詳細に踏み

込むことは難しい。各章の記述は、精神医療史的にはこれまでほとんど注目されてこなかった新事実（たとえば禁野火薬庫爆発事件）を含むという点で資料的な価値が高いとともに、戦時体験によるPTSD症例の検討といった現在にも引き継がれている課題をも扱っている。こうした、豊富なデータに支えられた現象記述的な部分が本書の根幹をなすものだが、もうひとつ重要なことは各章の記述に通底しているアカデミズムへの批判である。それは、戦争中の精神病院でのデング熱実験に見られる「人体実験許容の風潮」、あるいは日中戦争の戦場報告をした早尾庸雄が軍部から受けたであろう「上からの圧力」や「検閲」といった、人権や権力に関わる問題の検証作業を曖昧にしてきた日本の学界の歴史と現状への異議申し立てであるに違いない。このような歴史と現状は、岡田氏が「死から目をそむけるな—あとがき」で言及するナチスによるT4作戦（精神障害者の大量殺戮）について、その全容を明らかにする努力を今日まで続けている戦後のドイツ人研究者たちの執拗なまでの態度と対比できよう。わが国における、戦争と精神障害者に関わる歴史的な探求はまだ始まったばかり、というべきかもしれない。

（橋本 明）

[六花出版、〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-28 近藤ビル3F、TEL. 03 (3293) 8787、2019年7月、A5判、228頁、1,800円+税]

## 坂井建雄 編

### 『医学教育の歴史—古今と東西—』

本学会理事長の坂井建雄氏が編集された『医学教育の歴史 古今と東西』は、同じく同氏の編著となる『日本医学教育史』（東北大学出版会）に続く医学教育史の学術書であり、しかも前著が日本の医学教育史にとどまっていたのに対し、本書は表題のとおり、西洋医学教育史と日本の医学教育史を同時に取り上げるという難事に挑んだ力作である。坂井氏は本書とほぼ同時に関連する医史

学書として『図説 医学の歴史』（医学書院）を本書刊行の直後に公刊されており、まさにその研究的なエネルギーは無尽蔵かとすら思わせる。

本書は570ページを越える大著であり、編者の坂井氏を含めて11人の著者が執筆している。本来であればその一つひとつの論考について詳細に評する必要があるだろうが、時代も地域も広い本書の内容を個別に論じることは評者の能力を超え

る。そのため、各章の執筆者と論題を紹介し、そのうえで本書の構成や目指した方向性を評者なりに理解したうえで、それを伝えることによって責を塞ぎたい。

本書は大きく3部からなる。第Ⅰ部「西洋の医学教育」には3篇の西洋医学教育史に関する論考、第Ⅱ部「日本近世の医学教育」には3篇の江戸時代の医学教育活動に関する論考、そして第3部「日本近現代の医学教育」には明治以降の医学教育に関する論考が6篇にわたって展開されている。以降、各部での論考を紹介して本書の全体像を素描することとする。

第Ⅰ部「西洋の医学教育」では編者の坂井氏による「第1章 ヨーロッパの医学教育史〈1〉 十八世紀以前の西洋伝統医学教育」、同じく坂井氏の「第2章 ヨーロッパの医学教育史〈2〉 十八世紀以後の西洋近代化医学の成立と特徴」、そして永島剛氏の「第3章 近代ロンドンの病院医学校と医師資格制度 セント・トマス病院医学校を中心として」の3篇が中世期から19世紀までの西洋医学教育史をトピック的に論述している。特に坂井氏の浩瀚な学殖によって医学各科の学問形成史と大学医学教育・研究の成立過程が事例を巧みに挙げつつ論じられている。また永島氏の論考では高木兼寛の母校としても日本の医学史でもよく知られるセント・トマス病院医学校の成立と展開の詳細を知ることができる。

第Ⅱ部「日本近世の医学教育」では町泉寿郎氏の「第4章 江戸時代の医学教育〈1〉 瀬戸内地方の事例を中心に」、海原亮氏の「第5章 江戸時代の医学教育〈2〉 米沢藩の事例から」、青木歳幸氏の「第6章 江戸時代の医学教育〈3〉 佐賀藩医学教育史」の3篇からなる。いずれも厳密な実証医史学者として名高い各氏による地域の医学教育の動態に関する詳細な論考である。

第Ⅲ部「日本近現代の医学教育」では、編者の坂井氏による「第7章 近現代の医学教育の概観 明治以後の医師養成制度と医学校の変遷」、相川忠臣氏とハルメン・ポイケルス氏の共著である「第8章 近現代の医学教育の諸相〈1〉 十九世紀のオランダ語基礎医学教科書と蘭人教師たちの

影響」、澤井直氏による「第9章 近現代の医学教育の諸相〈2〉 明治・大正・昭和初期の医師資格制度と医学教育機関」、逢見憲一氏による「第10章 臨床医学教育における医師と医学の原像と「執拗低音」「ドイツ医学」と「アメリカ医学」の変容に関する一試論」、渡部幹夫氏による「第11章 臨床医学教育と疾病構造の変化 日本の結核史と結核教育史」、そして勝井恵子氏による「第12章 昭和期における医療倫理教育「医」の思想から「医学の哲学」へ」の6篇が近現代の日本医学教育史のまさしく諸相を描写している。この第3部で全体のほぼ半分を占める紙幅を費やしており、坂井氏の年来の研究の一つである日本の医学校、医大の形成過程に関する研究をはじめ、各氏の自家筆叢中の研究成果が披露されている。

本書の特長の一つは、西洋医学教育史と日本医学教育史のそれぞれ重要な論点をその領域の第一人者が実に丁寧な論考を行っていることである。特に編者の坂井氏はもとより、澤井氏、逢見氏、渡部氏らは、統計データを的確に押さえたうえでの論考を進めており、それが論旨を一層説得力のあるものにしていく。史料読解とともにこうした統計データにもとづく考察を行っていくところに医学研究としての医史学研究的独自性が示されている。こうした研究と、主として近世日本の医学教育史の各章に示された実証史学の堅固な手法に支えられた研究とがバランスよく構成されており、読学しようする者の満足度を一層高めている。

個々の論考に対する読後評をすべて示すことは、紙幅の許さぬところであるが、2点にわたって評者の関心を惹いた論考に触れると、永島氏のセント・トマス病院医学校の教育内容と19世紀イギリスにおける医師資格制度に関する研究からは、病院附属の医学校における教育方法の特徴とともに、イギリスの医師資格制度が医師集団の認定制を基本としていることがより明瞭に理解することができた。また、逢見氏の研究は、従来定説となりつつあった日本の医学教育がドイツの軍医学校のカリキュラムをモデルとしてそれが近代日本の教養教育を含めた医学教育システムの基盤を

形成しているという説に対して必ずしもそうではないことをデータにもとづき論証しつつ、そこに前近代の「儒医」モデルという参照枠を挿入することによって、丸山眞男の日本思想における「執拗低音」説を援用しながら、新たなテーゼを提唱している点はきわめて意欲的でかつ学ぶところが多い。

他にも論及すべき点が多いが、望蜀のごとき要望を述べれば、こうした固有の論点に沿った論考集としての医学教育史も壮挙であるが、新村拓氏によってなされた古代の典薬寮における医療官人

制から、戦後のインターン闘争や大学紛争、そして現代の医学部入学制度問題までを包括した通史的医学教育史が編者の手によって編まれることを願うのは評者のみではないだろう。ぜひとも実現してほしいと念ずるものである。

(瀧澤 利行)

[法政大学出版局, 〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-3 法政大学九段校舎内, TEL. 03 (5214) 5540, 2019年3月, A5判, 600頁, 6,400円+税]

## 書籍紹介

W.J. ビショップ 著, 川満富裕 訳

### 〈改訳新版〉『外科の歴史—近代外科の生い立ち—』

William John Bishop の *The Early History of Surgery* は1960年の初版になる評価の高い原著であり、川満富裕氏により2005年に『外科の歴史』として訳出され日本でも出版されていた。今回、川満氏は改訳新版『外科の歴史』—近代外科の生い立ち—として再版されたので紹介したい。W.J. ビショップ (1903–1961) はロンドン図書館、ロンドン王立内科協会、ウエルカム医学史図書館開設などに活躍した司書、書誌学者である。川満氏は前訳時の不十分であったところや、悪訳を全面的に改訳して今回の出版を行ったとしている。紹介者は初訳出版も所持している。ビショップによる10章からなる細部の訳出の変化を述べることは出来ないが、現代の外科の隆盛に先立つ、近代までの外科の医学史における位置づけを考えるには良い著作とかがえる。訳者は今回の出版に当たり「あとがき」に於いて、前版にはない「外科革命」、そして現在の「第二の外科革命」についてふれている。医学史・医史学を学び研究しているものにとっては、こちらの方への研究志向がこれからふかまってくるであろうと考えるが、外

科発展の前提となった事を理解しておくには大変に良い、おもしろい、そして人類と社会の歩みの理解に有意義な歴史書の出版と考え紹介する。今回の出版に於いて「訳注」「原著における引用文の出典」「原著文献」「事項索引」「人名索引」が充実されたことを付記しておきたい。本書は次の各章から成る。

- 第一章 外科の夜明け
- 第二章 古代オリエント
- 第三章 古代ギリシャと古代ローマ
- 第四章 中世ヨーロッパ
- 第五章 ルネッサンス
- 第六章 十七世紀
- 第七章 十八世紀
- 第八章 十九世紀前半
- 第九章 疼痛と感染の克服
- 第十章 リスター以後の手術

(渡部 幹夫)

[時空出版, 〒112-0002 東京都文京区小石川4-18-3, TEL. 03 (3812) 5313, 2019年3月, A5判, 320頁, 3,200円+税]